

ともに生きる喜びをはぐくむ高齢社会

1. 第8分科会参加報告

秋田県では全国一の高齢化率という課題を抱えている。高齢者単身世帯はあたりまえの時代の中、孤独感や病気などの深刻な問題に対して性や年齢、家族形態を越えて暮らしやすい社会に向けた取り組みを3人のシンポジストが事例報告をしました。



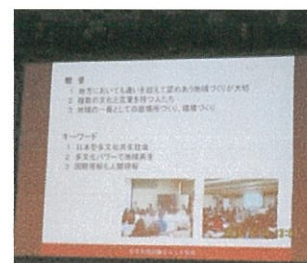
☆事例1

秋田銀行では2015年から「あきぎんエイジフレンドリーバンク宣言」長活きする秋田に基づく高齢化関連取り組みにかかわり2016年4月に「あきぎん長活き学校」企画運営を担い、県内各方面に『長活きシニア』の紹介活動を報告。

銀行の方が地域に入り地域の人を迎え入れることに何か裏があるのではないかと鋭い質問が出された。しかも、無料で長活き学校を開催していました。生きるだけでなく活き活きと生きるためのサポートです。シニア世代知恵と若者を結びつける取り組みです。その中で個人の持つ多様性を捉え、女性はコツコツ、男性はコツコツより役割を持つことで教えることや講師などに役割があると参加しやすくなるといわれます。そこに女性・男性の特性に目を向けてその人にあった学校づくりの経験が報告されました。この活動が銀行にとって廻りまわって預金者を増やすことに繋がっているのではないのでしょうか。

☆事例2

NHKプロフェッショナル『仕事の流儀』でも放映された、
「生きることの包括的支援～「秋田モデル」を全国へ～」
NPO法人蜘蛛の糸 自殺対策センター理事長 佐藤久雄



※別紙資料を参照しながら

秋田県の自殺者は全国一。(人口減少があるので率が上がる)
秋田県では自殺者は単身者よりも家族同居者が多いという報告に驚きました。高齢者の相談内容の38%が家族問題という点も対策として注視するが、なかなか高齢者の自殺対策には繋がっていません。シンポジストの佐藤氏は「自殺願望を持って生きる」そして希望を持って生きることが大切だと言います。ドイツのアウシュビッツで生き延びた例を基に笑っている人未来を信じる人が生き延びたと紹介しました。私には1、「自殺願望を持って生きる」2、「希望を持って生きる」この2つの言葉が心に残りました。

☆パネルディスカッション

「秋田市におけるエイジフレンドリーシティ」（高齢者にやさしい都市）

・秋田市福祉保健部長寿福祉課エイジフレンドリーシティ担当課長齊藤氏
一人ひとりが高齢になっても社会の支え手として役割の場と機会が得られる仕組みづくり、同時に支えが必要になってもその人らしく生き活きと暮らせる環境づくりを目指すものです。WHOが提唱するように秋田市では、今60代70代のシニア活動の場として有効になっています。報告を聞いて60代70代シニア世代はある程度体も動くし一人で家に閉じこもるより人のために何か役割を持っていることは、生きる希望に繋がっていると思います。ボランティアにどのような多様性をもって参加してもらうか秋田市だけでなく都市部でも同じようなことが言えるのではないのでしょうか。都市は都市部ゆえんに人間関係が疎遠になりがちになる問題点があると思うが、行政がどのように関わっていくか課題ではないのでしょうか。

☆コーディネーターから

超高齢化社会を支える“選択縁”

家族の“絆”から、対話を通して一緒につくる“縁”による相互扶助

超高齢化社会の先進地秋田ではどのような社会を目指していくのか問題提起がありました。高齢社会の多様性を持ってどう次世代に対してどのような縁をつくるのか今後の課題ではないかと思いました。

2. 大会に参加するに当たって

1) 日本女性会議に始めて参加するに当たって私事ではありますが、一緒に参加した奥山利子氏に資料提供を頂き問題意識を持って参加できたことを感謝しています。奥山さんから学習資料として、今回の第1分科会の講師上野千鶴子氏の講演「金持ち・家族持ち」から「人持ち」を学ばせてもらいました。内容はおひとり様に関する悩みから、日常の社会に起きている「よくある・あるある」ことが「人持ち」という視点で考えると、誰もが安心して弱者になれる社会づくりをしようと言われているように思いました。

そこで、私は今まで関わってきた仕事柄、第8分科会高齢社会に参加することになりました。

2) 33回を迎える日本女性会議は1975年国際婦人の年とそれに続く「国連婦人の10年」を記念して

1984年に第1回が名古屋市で開催されました。日本の女性運動は1995年の北京婦人会議の前後から盛り上が

ってきたと聞きます。1999年男女共同参画社会基本法が制定され全国各地でい



ろいろな取り組みが開催されるようになりました。女性解放運動は古くは平塚らいてうが叫びを上げてから110年以上になります。NHKの「とと姉ちゃん」でも取りあげられたのは承知の通りです。女性の手による女性の雑誌「青鞥」の発刊の辞の「元始女性は太陽であった…転々」は有名な一節ですが、女性の間宣言とも言われています。いろいろな場所でいろいろな人といろいろな時代に女性解放の運動が小さな繋がりがあって今日の33回を迎えていると実感しました。

3. 全体を通して散見

全日程のスケッチは別紙資料を参考にして頂けたらと思います。ここでは日程に参加できた会議等について感想や気付いた点について報告します。



☆新幹線秋田駅を降りて、まず驚いたことは、可愛らしいピンクの日本女性会議とかかれたノボリ旗とダリアの花で迎えを受けたことです。秋田県立会館まで続いていました。中でも道路の花壇の手作りの小さな案内版には感激しました。いろいろな関係者やボランティアさんの力を借りて、秋田市挙げての取り組みを垣間見たように思いました。東京から来たためか大きな駅から会場までは、女性会議に参加する方たちが目立っていました。ダリアがあちこちに見られたのは、秋田県の県花だと後で知りました。30日の体験型旅行には参加できなかったのですが街並みは紅葉も始まっておりとてもきれいでした。



☆ 開会式のアトラクション

東北三大祭りのひとつで竿燈を観ました。国の重要無形文化遺産として幼児から小学生・中学生・成人と各年齢層に渡り文化遺産の保存に力を入れていることが伝わってきました。



☆夜の交流会

全国の女性運動の方々と交流しようと奥山さんに名刺まで作ってもらいました。中でもこの会議に自費で毎年参加している方、毎年までは来られなくても2・3回来ているという方がいました。東京の方とあまり交流できませんでした。1700人も参加しているのですから。



☆基調報告

内閣府局長の武川氏から基調報告では、既に報道で知っていたものの世界フォーラム経済が発表した2016年度版「男女格差報告」では調査対象144か国中111位。国会議員は欧米ではほぼ2割日本では9.3%。管理職では欧米では3から4割日本では12.5%と言う報告に改めて共同参画が進んでないと共感したためか、会場がざわつきました。そして2016年4月に「女性活動推進法」が施行され、国が段階的に5兆円程度になったと報告がありましたが見込みに終わらせないでほしいと思いました。

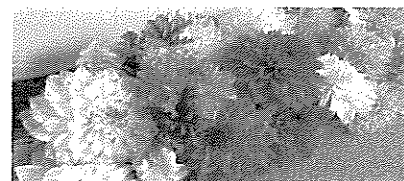
4. 終りに

日本女性会議に参加して、私にとって新しい窓を開いてくれたように感じました。女性の会議らしく明るく楽しく学びのある会議になっていたと思います。2017年は苫小牧で開催されます。参加できる方、一度は参加してはどうでしょうか。老婆心ながら行政の方も参加していただけると、成果を区内に持ち帰り活発になりやすいかなと感じました。ありがとうございました。

2016. 10. 28～30 吉田啓子



日本女性会議2016秋田 シンポジウム
シンポジスト：菊池 まゆみ（きくち まゆみ）
秋田県藤里町社会福祉協議会会長
社会福祉士、精神保健福祉士、主任介護支援専門員



秋田発「ケアリング（気遣いあう）」社会をめざして
～生活の場から「多様性」を考えよう～

藤里方式の現場から「ケアリング（気遣いあう）社会を考える」、ほんとに考えてきましたが、結論は出ないままやっていますので宜しくお願い致します。

藤里町、人口3,500人、先月、高齢化率44%を超えてしまいました。

先ほど、「ひきこもりと支援」ということでご紹介頂きましたが、私自身、ひきこもりの方々に関してずっと特別の人が、特別の事情でひきこもっていらっしゃるのではないかとイメージが先行していました。私が関わらせていただいた方々は、ごくごく普通の若者でした。

たとえば、三陸、日立に彼らと一緒にボランティアに行った時、ボランティアを受け入れる方々もいるし、受け入れない方々もいるのだと説明を聞いたとき、彼らと色々な話をしました。『あなた達だったら解るかもしれない』と。普通の生活をしていたつもりの人達が、ある日突然、被災者と呼ばれる。被災者として支援されなければいけない。自分の中で消化しきれない思いというのは、あなた達だったら、分かるんじゃないのと言ったら「死ぬほどわかる」と言いました。

普通の若者だったころ、ある日突然ひきこもりと呼ばれて家族ナイズされて支援される。それは結構きついことだったというような言い方をしています。

私共、社協の場合、限定がネットワーク活動事業でしたと書いているのは、私自身平成2年に社協職員になった時、「一人の不幸も見逃さない」という運動の担当者として採用されました。それが在宅福祉相談員と言う名前でしたが「一人の不幸も見逃さない。」とは、すごいスタンスなんだなって、思っていたが、実際は、昭和55年から始まって、私が入ったその時は「一人暮らし老人対策事業」になっていた。それちょっと違うんじゃないのかという思いがありました。それから、誰かを周りの人が支えるというこの構図も地域の中ではどうだろうなという思いが常にあった。地域で暮らすという中で一人暮らし、確かに不便さはあるけど、1年365日、支援が必要な人ですかと、また違う問題もあり、それらはずっと疑問に思っていました。

私は、担当者と偉そうに言っていますが、その当時はお茶くみが重要な仕事でした。あ

まり期待されていなかった。それがたまたま平成14年に事務局長になったんです。

うちの町、女性議員が一人もない町。行政の方も女性管理職が一人もいなかった町でしたので、ちょっと間違っただろうなとは思いますが、すぐに首になるかもしれないから、首になる前に好きな事をやっておきたいな、そういう発想でやっていました。それが藤里方式と勝手に自分たちで言っていた、「トータルケア推進事業」先ほどのネットワーク活動事業の構図を少し変えて、例えば一人暮らしの方々、福祉のニーズを持つ方としていらっしゃる、身体障がい者の方々も、もちろんいらっしゃるけれども、支援する側、インホーム・ド・サポートになれるはずの人ではないか。という発想から、一人暮らしの方々にもお願いしていたのは一人で暮らしている分、不便さは確かにあるかもしれないけれど家族がいない分、自分の采配で、自分で自由に使える時間がある人達だから、地域のために頑張りたいよと言ったらそこをちょっと応援する。身体障がい者の方々には『左手、俺ないんだ』って言えば、右手その分すごい筋肉あるから、右手で頑張れる社会貢献ってあるはずじゃないかということで、そこをお手伝いするのが社協なんじゃないのか。ということでトータルケア推進事業を始めさせていただきました。

その他として、ひきこもりの方々に関しましては、私は、最初ひきこもり支援をやるつもりがなかった。ひきこもりという問題を何とかしてあげようという話ではなくて、今の若い方たちが、ちょっと失敗しただけで、つまずくと、戻り方がわからない。身動きが取れずにいる。そういう若者がいらっしゃるように見えたのでほんのちょっと後押しをする。ひきこもりであろうと何であろうと地域で暮らす方々には違いがないのだから。そこをちょっとお会いできれば、という思いから始めようとしたのです。ただ福祉ですので、対象者を明確にせよ！若者支援はちょっと福祉に合わない！と言われ、一生懸命つけた名前が、【ひきこもり者、および、長期復帰就労者、および、在宅障がい者等支援事業】ということで、ひきこもりと支援を始めたのですが、私共よく言われたのが、精神医療の専門家でもないのに、教育者でもないのに、ひきこもりのどなたの支援ができるのかと。心配されました。ひきこもり支援と言うと、やっぱり医療的支援が必要な人たち。

私たち、心の闇をどうにかしようという話ではなく、ひきこもりの方々も地域で暮らす人であって家にばかりいるのはいやだ、と思う時もあるかもしれない。このままでは終わりたくないから外に出たいと思う時があるかもしれない。そういう時にちょっと支援できたらなあ、ということで、みなさんに説明して歩いたのは、風邪を引いたときの話をしました。治療も出来ないし薬の処方もできません。だけど風邪をひいて、食欲が無いといえば、食欲の出るような工夫をしてさし上げられる。汗をかいて気持ち悪いって言ったら着替えを手伝ってさし上げられる。福祉だからできる支援。福祉でなきゃできない支援みたいなことをお医者さんの真似をしても、カウンセラーの真似をしても出来ないことはできないから。福祉でできる支援をやらせて頂いたところです。

共同事務所「こみっと」を置いて支援を始めた時、家から出てきて、(共同事務所には) いろんな団体さんに所属して頂いているので、「こみっと」にくるとそのまま地域デビューが出来るようにしたいということでやらせていただきました。(ああ、あの人達と言われないうちに)

「こみっと」はランチタイムに手打ちそばを提供している(就労支援として)。ある程度頑張れるような人たちには、工賃をきちんと払いたいということから、「白神まいたけキッシュ」を売り出しました。初年度(平成24年)450万円売れた。小さな町で450万円の売上というのは、ちょっとすごかったのです。そしたら町民の方々の、私たちを見る目がかなり変わった。ひきこもりだったんだけど能力の低い人たちということではないんですよ、妙な人たちというイメージとは違うんですよ、みたいなことを口で言っていた時は理解してもらえなかったのに、450万円売れた、となったら、『ああ、そうだよな、一生懸命若者が頑張れば、やればその位、いくんだよな!』って思ってくれました。それと同時に、まだまだ出てこられずに若者達がいっぱいいる。と分っているので、『埋もれさせるのはもったいないぞ。頑張って連れ出してやりな。』みたいにイメージが変わった。さらに学習して、「こみっとうどん」を作った。丸亀うどんよりも美味しいはずだった。今度はえらそうに町の活性化に使ってください、イベントに使ってくださいと。そしたら観光客が押し寄せてくるかもしれない。そういう野望は話していますが、実際はぜんぜん売れていない。

ただ、私共のスタンスは、分かってもらえた。「こみっと」に集っている若者達は、町の為に一生懸命頑張っているぞ、というスタンスだけは分かって頂けてます。そしてその結果みたいなものですが、22年ひきこもりと支援を初めて26年度末にはひきこもり者等113人いた方々が、25人残りました。25人の方々は、重度の障がいを持っていました必ずしも家から出ることが自立に繋がる訳ではなくて、という方々がいらっしゃいます。

よろよろと始めたひきこもりと支援でしたが、そういう形の支援でも何とか形になってきました。若者支援から、今度は、社協が27年度から始めているのは地方創生事業に参入しています。なぜかと言うと、地方創生は元気100%、力100%の人達の行う地方創生で、社協がかかわるような弱者と呼ばれる人たちが、誰かがやってくれた恩恵を受けるだけ。それは変な話じゃないか。デイサービスを使い始めた人でも、ひきこもりだったとしても、障がい者だった人たちでも出来る形の参加の仕方があるはずで、そういう人たちでも担い手になれる地方創生でなければいけないのではないかと。ということで無謀にも総務省に手を挙げましてゲットしたので27年度頑張りました。今年度から実践する事業、ということで、プラチナバンク、根っこビジネス、若者支援ということで自宅体験プログラム、などいろいろやっています。・だんだん、福祉って何だろう?最後には蕨の根っこのために野焼きを始めたり、いろんなことをやっていますので、もし、応援する気持ちがありましたらちょっとお立ちよりくだされば仕事は山のようにあります。ありがとうございました。

記録 奥山

☆☆☆☆☆

シンポジスト 菊池 まゆみさんのお話をお聞きして・・・そして最後に・・・

秋田県藤里町は、白神山地のふもとに広がる、人口3,500人の町、若者の多くは町から出ていき、65歳以上の高齢者が人口の4割を超えているという。その藤里町は、もうひとつの問題に気付いた。ひきこもり。(2006年)きっかけは、家にひきこもっている若者がたくさんいるから、調べてほしいというお年寄りからの相談でした。誰が、どこに閉じこもっているのか。地域福祉を担う社会福祉協議会が、町に埋もれる人たちを探し始めた。調査の先頭に立った方が、今回のシンポジストの菊池 まゆみさんです。

菊池さんは実態をつかむため、住民に協力を求め、自治会や民生委員、PTAなどのネットワークを活用し、情報を集め、一人一人のリストを作成した。

この藤里町の取り組みは、NHK「おはよう日本」「クローズアップ現代」、日本テレビ「ニュースゼロ」などのテレビ番組でも取り上げられました。私は秋田へ行く前からとても興味がありました。

菊池 まゆみさんは、ウイットに富んでいて、秋田言葉で話され、現地にすぐ行ってみたいくなるようなお話ぶりでした。ひきこもりの方々が菊池さんと活動が出来たのはそんなお人柄があつてのことでしょう。

私は今回の日本女性会議2016秋田に参加させて頂いて多くのことを学び、感動しました。男女平等・共同参画という柱のもとで日ごろ、ささやかではありますが、活動しています。政府の「女性の活躍」とか「女性活用」という言葉を聞くたびに、良い言葉なのか、女性を応援する言葉なのか考えてしまいます。女性が働きやすい職場作り、また社会環境を整える女性の目線からの名称には感じられない。ほんとうの意味は別としても勘違いしやすい。「家事、育児、介護、男性活用」といったキャチコピーをはっきり表に出すことは出来ないのでしょうか。藤里方式が成功したのは、「当事者主権」の精神があつたからだと思う。ひきこもりの方々に対する思いやりや、彼らの思いを受け入れることが大切だと話され、会場から菊池さんの思いが伝わってきました。安倍総理が、女性の人権侵害根絶へ「世界をリードしていく」と国連で演説したことはお忘れではないでしょうか。「女性の活躍」という言葉からは感じられない。

日ごろ思っているもなかなか表現できなかつたが、秋田で学び男女平等・共同参画というよりも、それを超えた、多様性(ダイバーシティ)の精神が、日本の少子高齢化社会には不可欠な条件だと思いました。

そしてこの日本女性会議をもっと多くの方に参加して頂き、少子高齢化には、男女平等・共同参画が不可欠だと皆さんにも感じて頂きたいと思います。これからも、おおいに関心を持ちたいと思っていますので、もしこの記録をお読みになってぜひ参加したいと思われた方、またこの記録の内容等でお聞きになりたいことや、議論してみたいことがありますたらご一報ください。お待ちしております。

ウイメンズめぐろ 奥山 利子